
美形じゃなくて何が悪いっ！

コトバ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美形じゃなくて何が悪いっ！

【Nコード】

N9784P

【作者名】

コトバ

【あらすじ】

突然来てしまった異世界は美形至上主義の世界だった！？
顔も普通の弱小盗賊団に拾われた美形でも何でもない綺麗ごと主義な主人公。問題は多いけど何とか暮らしてます。
コメディだったりシリアスだったりの異世界トリップファンタジー。

とある夜中

「そしたら奴はこう言ったのさ」

まるで何か重要なことを話すように、その男はじつと周りを見回した。

立ち上がり話をする少々……というかデブな男の周りを取り囲むようにして話を聞いていた多種多様な男たちはゴクリと唾を飲む。

「お前みたいな不細工に出された飯なんて不味くて食べねえ！！
てな」

声高々にそう言ったデブを見て、周りの男たちは一瞬言葉を失い次の瞬間雄たけびを上げた。

「うおおおおおおお、なんて可哀想なんだ！」

「お嬢は確かに美形じゃねいけどよお、そこまで不味い顔してないだろっ。むしろ下の上だろっ」

「お嬢！なんて可哀想なんだっ」

「おおおおおおおっお嬢！！お嬢おおおおお」

「ム力つくぜ、その男っ。お嬢になんて酷いことをー！！」

「だからお嬢昨日の晩妙に落ち込んでいたのか……」

「顔は美人じゃないけど、お嬢は性格美人だ！お高くとまってる奴らなんかよりよっぽどいいっ！」

「そうだそうだ！！」

「……うるさいんですけど」

雄たけびを上げる男たちの中には瞳が潤んでいる者もいる。
そんな男たちを見ながらわたしはため息をついた。

「お嬢！」

「お嬢、俺らは美形貴族なんかよりも、ちょっと不細工で性格美人なお嬢の方が断然好きですっ」

「女のくせに料理が苦手で、それでもがんばるお嬢が好きっす」

「そうですっ！味に多少問題があってもそんななお嬢の愛情でカバーできます」

「さつきからいろいろ聞いてるけど、わたしはこれでも一応傷ついてますからね」

料理上手じゃなくて悪かったな。だいたい女がみんな料理上手と思っただけ大間違いだ。

というか今は男女平等の時代だろう？男が料理すればいいわけで、女が料理できる必要性はあまりないのだ。

「ああお嬢！それでもバイト止めずに頑張ってるんですね」

「さすがですお嬢！」

「それでこそお嬢！」

「だってわたしがバイト止めたらみんなが飢え死にしちゃうでしょう……」

そつえば男たちは一斉に黙り込んだ。
事実を言われてはどうしようもできないのだろう。

「夜中に騒いでるんじゃないよ」

丁度よく聞こえてきた声に振り向けば、
気だるげにな様子で歩いてくる男が一人。

「エデウ」

「頭！」

「お頭！ー！」

ダンディという言葉がよく似合うその男はこちらに視線を向けるとスッと目を細めた。

「お前らもう夜中だぞ、さっさと寝ろ。近所迷惑だ」

近所迷惑って……

ここの近所に住んでいる人なんていないんですけど。

それに……

「お頭っ、俺ら盗賊ですよ！夜中だからこそ動くんでしょう！」「
「そうっすよ」

「お嬢に酷いことした貴族どもを狙ってっ」「
「んなことしたらお前ら5分もしないうちに捕まるだろーが」

ごもつとも。

わたしと同じことを思ったのか男たちも黙り込んでしまう。

「俺らって本当になんも取り柄ないよな……」

「盗賊なんて名ばかりでさ」

「最後に盗みに成功したのいつだったっけか？」

「アレだよほら3ヶ月前に迷子になった馬が持ってた荷物をさあ」

「ああ！アレ何気にいい物持ってたよな」

「馬の飾りも高く売れたしな」

そこまで言って男たちは大きくため息をついた。
自分たちの不甲斐なさでも感じているのだろう。

「みんなそう落ち込まないでよ。そりゃ盗賊としてはみんなその……イマイチだけど。料理上手だし。掃除も好きだし。優しいし。仲間思いだし。他にもいいところいっぱいあると思うよ」

たぶん……ね

わたしがそういうと男たちはその瞳をウルウルとさせた。

嫌な予感がするのはなぜだろう……
そしてその予感の外れることもなく

「お嬢おおおおおおおおお!!」

「なんて優しいんだっ!」

「一生お嬢について行きます」

「お嬢は世界一の女だああああああ」

またしても雄たけびを上げる男たちにわたしはため息をついた。

「エデウ……どうにかしてください」

「お前が原因だろ?自分でなんとかしろ」

とかいって面白そうに笑っている。

わたしはいまだに雄たけびを上げながらも楽しそうにしている男たちを見てもう少しくらいはいいかなと思った。

「もうすぐ5ヶ月だな」

「え？」

男たちをみて微かに笑みを浮かべていたわたしにエデウはそう言ってきた。

「お前がココにきてもうすぐ5ヶ月たつ」

「ああ………そういえばそうですね」

「早いもんだな」

「早いものです」

わたしがこの自他ともに認める弱小盗賊団に拾われて5ヶ月。それはわたしがこの世界、アンゲルヴオにきて5ヶ月が立つことを意味する。

5ヶ月前わたしはこの世界に突然来てしまった。

中央大陸アンゲルヴオ。

それは今までのわたしの常識なんて通用しない美形至上主義の世界。

そしてここはアンゲルヴォの中央地から外れた場所である。

「お前は今幸せか？」

エデウが言った言葉にわたしは小さく微笑んだ。

とある夜中（後書き）

はじめまして読んでいただきありがとうございます。
コトバと申します。

拙い文章ですが読んでくださると嬉しいです。
更新はゆっくりマイペースですがよろしくお願いします。

弱小盗賊団の一日 その1

盗賊団ラピナこと、我らが弱小盗賊団の朝は早い。

「お嬢、朝ですよ！お嬢！お嬢ってば」

「……起きてますから」

朝からそんな大声で呼ばれなくても大丈夫だって。

「だったら早く布団から出てください。朝食の準備はとつくに出来てますよ」

「……分かってますよ。でも身体が動かなくて……」

「毎朝毎朝同じこと言わないでください」

そんなこと言われても困る。

こつちだつて起きたいのは山々だが身体から眠気が取れないのだから仕方がないだろう。

「あと5分」

「いーえ起きてもらいます」

「無理です」

そこまで言うときくため息を疲れた。

「全く………暴れないでくださいよ」
「え？」

何も言わないから諦めたのかと思ったがそれは間違いだった。
呆れたような声が響いたかと思うと、温かな布団がわたしの体から離れていき、次の瞬間別の温もりがわたしを包み込む。

「えっ………ちょ何をっ」
「お嬢が早く起きないからです」

いつの間にかわたしはその腕の中にいた。
軽々とわたしを抱き上げたかと思うと、片手でテントの入り口を開けて外に出る。

そこまで来てやっとわたしの頭は覚醒した。

残念ながらお姫様だっこではないが……いや別にお姫様だっこを期待していたわけではないけれど。

とにかく！年頃の女がこのような扱いは不味いであろう。

「なっ何するんですか！下ろしてくださいっ」
「暴れないでくださいと言ったでしょう………」
「嫌です！下ろしてくださいってばっ、カレー……！」

わたしが言った言葉に男の動きがピタリと止まった。
そしてロボットのようにならずに少しづつ首を動かすと恨めしそうな目で
こちらを見て、一言。

「……カリーです」

もちろんそんなこと知っている。

わたしはカリーことカリーに極上の笑みを浮かべた。

「カリーの方が馴染みがあって良いじゃないですか」

「……お嬢の基準って分からないです」

「そりゃそうですね」

カリーはニコニコと笑うわたしを見て諦めたようにため息をついた。

ちなみにこの世界にはカリーという食べ物はない。それらしい食材があつたらぜひ一度カリーに食べさせてあげたいものだ。

わたしだってカリーくらい作れる。

たぶん……

「あつお嬢！おはようございます」

「はよっすお嬢！」

「お嬢、髪型やバイっすよ」

「昨日はよく眠れましたか？お嬢」

「てかお嬢なんでだっこされてるんですか」

「……おはようございます」

何だかんだ言っているうちにみんなの所にたどり着いてしまったようだ。

ポンポンと肩を叩くとカーリーは優しくわたしを地面に下ろしてくれる。

「ありがとう」

「いえいえ」

一応お礼を言ったあとわたしは手で髪の毛を軽く梳かした。
髪型が酷いのいつものことだが、誰かに言われるとさすがに気になるというものだ。

そんなことしていると、食事の良いにおいがしてくる。
それにいつもより香ばしい匂いだ。

「お嬢、今日の朝食は肉っすよ」

「えっ本当に？」

「本当ですって、ほら見てくださいよ」

そう言って、仲間の一人が嬉しそうに肉の入った鍋を見せてくる。ウサギのような外見をした肉がゴロリと丸々入った鍋にわたしは苦笑した。

まあ、異世界なだけあった文化の違いというのは大きい。だがさすがに姿形がそのまんまというのは衝撃的だ。今は多少慣れたものの、最初は叫んでしまったものだ。

わたしも成長したなあなんてしみじみと思う。

「お嬢の分は多めにしますからね」

「えっ、わたしはちよつとでいいですって。皆食べたいだろうし、貴重な肉なんですから」

「いやいや、お嬢はもう少し太ったほうがいいですよ、そのためにも肉食べて脂肪つけるべきっす！な？」

「そうそう。遠慮しないで食べてください」

「お嬢は細すぎですって」

弱小盗賊団のわたしたちにとって肉は滅多に食べれない貴重品である。みんな自分が少しでも多く食べたいはずなのに……

「ありがとうございます」

わたしはニコリと微笑んだ。
すると彼らも嬉しそうに微笑み返してくる。

「この皆の何よりの良さはこの優しさであるつ。

「あつ、そういえばカレー」

「……カレーです」

「分かってますつて。それより、いつもより起こす時間早くないですか？」

「ええ、だって今日はアレでしょう？」

「アレ？」

首をかしげて聞けば、カリーの手が向こう側を指す。
首を動かしてそちらを見てみれば……

「ああ……そういえば今日でしたね」

「昨日は眠れなかったらしいですよ、全員」

「ありや……」

視線の先には見るからに緊張しまくっている男が3人。いつもの
軽装ではなくてそれなりのモノを身につけたいた。

「たかだかバイトの面接なのに……」

「いや、あいつ等にとっては初体験ですからね」

「ものすつごく心配なんですけど」

「同感です」

盗賊というのは盗みをして暮らしている。
そりゃ豪華なものが盗めれば案外贅沢な暮らしが出来るが、逆に
言ってしまうえば盗めなければ貧乏なのである。

我らが弱小盗賊団ラピナも例外ではなく盗みたくても盗めないた
めにかなり貧乏なのだ。

それこそ盗賊のくせにバイトに出て稼がなくてはならないほどに
……

「まああいつ等はマシなほうですし、ものすごいミスをしなけれ
ば何とかなるか」と

「ものすごいミス……しそうで怖いですね」

「とにかく行く前にお嬢のお言葉がほしいのだとか」

「了解です」

この大陸でのバイト探しの問題は一つ。

この大陸ではバイト先、はたまた就職先を見つけるのは簡単であ
り難しい。

何故かって？

簡単な話だ。

この世界……大陸が美形至上主義だからである。

弱小盗賊団の一日 その2

美形至上主義国アンゲルヴオ。

就職するにしてもなににしてもまず第一に顔の良さが重要となってくるこの世界。

上流貴族になるほど顔が良く、王族なんてこの世のものとは思えないほどの美形なんだとか。

そんな世界でのバイト探しは美形であれば簡単だが、そうでなければ非常に難しい。

我らが盗賊団ラピナの人間はものすごい不細工はいないものの、まあ普通の顔立ちの人間が多い。

今回受けるバイトは店の下働きだが、この面接もなかなか狭き門なのだ。

貴族というのは美形ではない者が店の表にいと近寄ってこない。だから美形ではない者にはほとんど仕事がないわけだが、唯一の仕事が裏であたら働ける仕事まあ下働きである。

そのためいわゆる普通と言われる顔をした人間が多くこの職業に就きたがるわけだ。

集まった普通の中でも顔がよく対応が出来る人間が選ばれる。

全く、美形至上主義なんて面倒な世界だ。

そして今回は面接を受ける3人は……

「おっお嬢おおお！どうしましょう。きっと俺お前みたいなデブはいらねえって追い出されちゃうんですよっ」

「俺なんて、顔が怖いからってみつ店にも入れてもらえないかもっ」

「僕は、もう無理です。面接なんてもの……お嬢！！助けてくださいiiiiii」

「……おはようございます。寝てないわりには元気ですね」

わたしから言わせれば彼ら3人は決して不細工なんかではないのだが、この美形国はなんともおそろしく、3人は幼いころから不細工やらデブやら言われ続けこのような性格になってしまったらしい。こいつらが不細工だったらわたしはどうなってしまうのやら……。こんなわたしでもなんとかバイト先があるのだから大丈夫だろうに……

まあ、今の職につくために23件ほどバイトの面接を受けたが……それは置いておこう。

「全く、お嬢ばかりに働かせては面目ないからと言って自ら名乗り出ておいて……」

カリーが後ろで呟くように言った言葉にわたしはびっくりして振り返った。でもその視線は3人に向いていてその話が本当かどうかは分からない。

前を向けば、仲間たちが3人を励まそうとして円を作っている。
本当にこの人たちはなんとも温かい。

「大丈夫ですよ」

わたしの言葉に3人は情けない顔で振り向いた。
なんとも似合わないその顔について笑いそうになってしまう。

「アドネはデブじゃなくてがっちりしてるだけです。せつかく男らしいんだからもつとしゃっきりしてください」

「おっお嬢っ」

「ジルは目つきは怖いかもしれないけど……すごく優しいし世話好きだし動物好きだしそういうところわたし好きですよ。いつものジルでいけば大丈夫です」

「おっおす」

「チロは……ちょっと気弱だけど優しくて愛らしい顔しているし、それに料理上手だから大丈夫。面接で駄目なら実技の料理試験で頑張ってくださいよ。チロの料理はすごくおいしくてわたしが保障しますから」

「お嬢おおおお」

わたしが言い終わると3人……とその他大勢がウルウルしためでわたしを見ている。

少々嫌な予感……

「お嬢つつつつ!!」

「お嬢の優しさにはいつも涙がでそうっす」

「なんでそんなに優しいですかあ」

「もうお嬢なしには生きてけませんっ」

「お嬢に一生ついていきます!!」

「お嬢!お嬢おおおおお」

「んな大袈裟な……」

いつものことだか、なんていうか皆男のくせに涙脆すぎる。

もうすこしプライドというものを持つべきだ……

どうしたものかと、うしろに立って相変わらず呆れ顔のカーリーに助けを求めると、仕方がないと言う感じでわたしの前に立った。

「はいはい、そのくらいにしてみんな持ち場に戻って。アドネ、

ジル、チロ貴方たちはそろそろ出ないと時間に間に合わなくて失格になりますよ」

「頑張ってくださいね」

「お嬢!見ててくださいっ」

「俺らお嬢のために血が出ようがなんだろうが仕事掴んできます

!」

「行つてきますっお嬢!」

「行つてらっしゃい……」

血は出さなくていいのだが……まあやる気になってくれればそれで良い。

3人は先ほどとは打って変わった様子で、意気揚々と馬のいる方へと走って行った。

怪我しなければいいのだが……

「朝から賑やかだったなあ」

3人が見えなくなるまで見守っていると不意に後ろから声が聞こえた。

びつくりして振り返れば、この弱小盗賊団唯一の美形がそこにいる。

「エデウ……」

「お頭、ずいぶんお早いお目覚めで……」

盗賊ラピナの頭、エデウ。

異世界にきたわたしを拾ってくれた恩人は、ダンディ感たっぷりの美形である。

歳は30後半らしいが、なんとも若若しい。

「アレだけ朝から騒いどいてそれを言うか？」

「ああそうでしたね」

「ったく、貴重な睡眠時間を削りやがって……」

まあ確かにうるさかったけどね……

それはわたしのせいではない。エデウの部下のせいだ。

「それにしてもお前、相変わらずだったな」

エデウの瞳がスツと細められてわたしを見る。
そんな彼にわたしはニコリと微笑み返した。

「何がでしょう?。」

「ククク……さあ?。」

そこまで言うといエデウはわたしから視線を外した。

「カリー、今日の朝メシは何だ?。」

「今日は肉だとさつき騒いでましたよ。」

「おお肉? そりゃいいねえ。」

エデウのはニヤリと微笑むともう一度こちらを見る。

「ほら行くぞ、リツ。」

名を呼ばれてわたしはもう一度微笑だ。

「はい!。」

弱小盗賊団ラピナの1日は始まったばかり……

弱小盗賊団の一日 その3

今日も一日疲れたなあ、なんて考えながらわたしは静かに読書をする。

カリーが入れてくれた（入れさせた）紅茶は少し苦い。
やっぱりチロの入れてくれた紅茶じゃなくちゃなあ……なんて考えていたら急に大きな音が聞こえてきた。

全く、静かなアフタヌーンティータイムを邪魔するのは誰だなんて思いながら体を起こすのと同時にテントの中に3人の男が入ってきた。

「お嬢おおおおお！」

「お、俺、やつやりましあつあああああ」

「お嬢ううう、僕生きててよかったですうう」

いつものことだが壮大だな、発言が。

わたしのテントに入ってきた3人は、朝バイトの面接に行った3人だった。

この様子だと、受かったのだろうか……
なんでこんなにボロボロなんだろうか？

3人ともせっかく面接のために買った良さげな服が破れて、怪我もしている。

一体何の面接を受けに行ったのだろう……ただの下働きじゃないのか。

「えーと受かったんですね？」

一応確認のために聞いてみる。
すると三人ともコクコクと勢いよく頷いた。

なんか可愛い。

「これで、お嬢の負担が減らせます」

「お嬢、今まですいませんしたあ！これからは俺らが稼ぎます！
！」

「僕も頑張ります！！だからお嬢はゆっくりして下さい！！」

「3人とも……」

わたしのためにバイトの面接に行ったというカリーの話は本当らしい。

愛されてるなあ……なんてガラにもなく考えて幸せを感じる。

「ありがとうございます。でも3人だけに頑張らせるわけにはいきません。わたしもまだまだ頑張りますよ」

「でっ、でもそれじゃあお嬢の負担が」

「みんなで頑張ればもつと贅沢できますよ？わたし、みんなに思いつきり食べさせてあげるのが夢なんです」

ここでの食事は節約に節約を重ねているので必要最低限だ。

わたしでももう少し食べれるかな？という程度なので男のみんなはさぞお腹を空かしていることだろう。

だから、そんなみんなにお腹いっぱい食べさせたあげたらいいのにな、と考えていたのだ……

「お嬢……そんなことを」

「俺たちのために？お嬢が……」

「うっ……うううう、お嬢ううう」

あつ、またやつちやつた？

「「「「「お嬢大好きですううううう！！」「」「」「」

そう叫んだのは、3人だけではなかった。
狭いテントの中に大きな男たちが次々と流れ込んでくる。

「お嬢おおおお」

「わわっ」

涙でぐちゃぐちゃの顔をした男たちはわたしの目の前ギリギリまで来て、情けない声を出した。

「俺、お嬢がそんなに俺たちのこと思ってくれてるなんて知らなかったっす」

「お嬢！俺もバイトの面接行きます！！」

「僕、お嬢にもつと綺麗な服着せてあげたいです」

「おっ、俺だってお嬢を綺麗なベツトで寝かしてやりてえよ」

「アクセサリーとか絶対お嬢に似合います!!」

「お嬢の好きな本だつて、買ってあげたい」

「みんな……」

男たちは次々とわたしに何をしてあげたいか言い合った。

本当に、わたしって………

「幸せもんだなあ、リツ」

名を呼ばれてびっくりしながら横を向けば、いつの間にか隣にエ
デウがいた。

ニヤリとしたいつもの笑みを浮かべながら、エデウはわたしの
肩を抱く。

「おい、バイトの面接の報告はリツじゃなくて普通頭の俺が最初
じゃないのか?」

エデウはそう言ってバイト面接に行った3人を見た。

「えっと」

「ああー」

「お頭……そのお」

3人は困ったような顔をしながら言葉を濁す。

エデウに言う前に来ちゃったんだ。それは確かに良くないだろう。
でも……

周りの男たちも押し黙る。

涙も引っ込んだようだ。

「エデウ……」

叱らないであげてほしいという意味を込めてそういえば、エデウは豪快な笑みを見せた。

「ハハハッ！……！なんて、俺が怒ると思ったか？」

笑顔のエデウにみんな肩を下ろす。

「今夜は宴だ！……！酒持ってこい！酒！……！」

エデウがそう叫べば男たちは一気に盛り上がる。

「宴だ宴！！！」

「酒の許可がでたぞおおっお！！！」

「チロ！お前なんか飯も作れ！！！」

「はっはい！！いますぐ！！！」

「今夜は騒ぐぞおおお！！！！！」

男たちは叫びながらテントを出て行った。
一気にテントの中は静かになる。

「お酒いいんですか？」

お酒は貴重だ。

高いからそう簡単に買えるものではない。

「いーんだよ。宴に酒がなきゃ楽しくないだろ？」

エデウはニヤリと笑みを見せた。

「まあこれで絶世の美女でもいれば完璧なんだが……」

チラリとこちらに視線を向けるエデウ。

「悪かったですね。絶世の美女じゃなくて……」

わたしはプイツと視線をそらした。

またしてもエデウは豪快な笑みを見せる。

「冗談だつて、さあ行くか」

「……はい」

少しむくれたままのわたしの頭をエデウはポンポンと撫でた。

「お前は十分可愛いよ」

「……そりやどうも」

「素直じゃないなあ」

エデウがテントを出る。

わたしもその後を追った。

少しだけ赤くなった顔は、外の冷たい風が冷やしてくれた。

弱小盗賊団の一日 その3（後書き）

約1年ぶりの更新でした。

実はずっとサイトの方見てなくて今日たまたま見たら感想が書いてあったんです。

更新する予定はないのですか？と書いてあつてすごく嬉しく思いました。

こんなに月日をあけているのに更新を待つてくださってる人がいるならもう一度書こう！ということでした。久しぶりに書きました。

感想を書いて下さったのは8月のことで、お返事も出来なかったのでもう見て下さっていないかもしれませんが、ありがとうございます。

ゆっくりペースかもしれませんが、また書いていこうと思います。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9784p/>

美形じゃなくて何が悪いっ！

2011年12月3日19時51分発行